ホテルお好み次第

〝魔法の杖〟白墨片手

Xマスイーヴ 憧れの杭州で支局捜し

戰爭の横顔 ①

兒玉特派員手記

記者は五ケ月ぶりに江南の戰線から歸つてきた、長崎についた旅館の二階で寢てゐると、すぐ下の舗道を通る下駄の音がカラ〳〵、コロ〳〵めづらしく耳についてしやうがなかつた、戰爭とは？天井を見ながらボンヤリ考へたが、戰線のごとく湧きあがつてまさに夢のごとくさつぱりまとまりがつかない、あんまり壯大すぎるのである、戰爭とは國家と國家がその科學と人材、富を總動員して必死の氣魄で立ち上り四つに組んだ死鬪だともいへる、そして〝死〟の悲慘な正面は讀者はすでに御承知だ、で記者はその「よこがほ」を描いてみた

雨に洗はれた道の小石が白く光つていつぱい顔を出してゐた、雨上りの杭州街道の楊柳の並木道を僕、東朝の星野、小島君、無電の宮脇さんらは兵隊さんと一緒に徒歩で通つた、十二月二十四日の黄昏どきである

「記者さん、リユックサック持つたげまつせうか」

「あゝ有難う、なあに大丈夫ですたい」

「アッハッハ〳〵」

辿りながら兵隊さんも笑つた、眞つ黒に陽にやけた兵隊さんの頬ぺたに鐵兜の下から

汗の玉がツル〳〵と落ちてきた、大きな頭をブルリッと振つて

「朝日新聞さんとこトリなつせいよ、杭州はよかホテルが何ぼでもあるちうけん」

この兵隊さんたちは〇〇隊である、軍隊が一つの街に入る時はまづ宿舍とベッドをとらねばならない、杭州、杭州、ヴエニスの詩人マルコ・ポーロが「おう天上の都、地上の樂園！」とイタリヤ語で唸つたきり詠歎とした西湖はいまもう眼の前にある、僕もまた眼をムクであらうか、辿りながらヒヨイと〈あゝ、今夜はクリスマス・イーヴだぞ〉と氣がついた、さう思ふ

と急に山腹ホテルの今夜のことがまざ〳〵と頭の中に浮かんできた、風船玉と紙帽子と人いきれ、それから鼻にチーンとくる白い冷たいエビの肉の舌ざはりと眼にあたるナイフの金屬音までが生々しい實感をもつて甦つてきたからヘンなものだ、唾が出てきた、おや〳〵、僕は何となくをかしくなつてひとりでヒゲ面をゆがめてニヤ〳〵と笑つてしまつた、五、六間先を驢馬隊の兵隊がこれも大きなリユックサックを背負つて長い外套の裾をはね上げはね上げ通つてゐる

「ワッショイ〳〵」

誰がいふとなくワッショイ、ワッショイ、われ〳〵の一隊はしまひには軍歌のコーラスあげて通つた、どの兵隊さんの顔も赤く上氣して活々した明るい嬉しさに輝いてゐた

（たうとう杭州だ、杭州に來たんだ、江南の野三百五十里、棒のやうになつた

足も今夜こそゆつくりのばせるぞ、西湖で顔も洗へるぞ

坂を曲ると、右手に黄色の空をバックに奇怪な岩石の山容が屏風のやうに展がつた、葛嶺だ、その山の上にニヨツキと立つ塔、あゝ保俶塔だ

「おーい、高君、白墨持つてるかあー」

半分振り向いた高君の笑顔が頬ぺたを赤くして右手を高く振つた、振りながら、さて白墨は何に使ふ？

◇

紫色の黄昏の中に西湖は銀色に光つてゐた、たしかにこの西湖の容貌には色がついてゐるやうに思はれた、それほどすばらしい夢のやうな美しさなのだ、僕もまたマルコ・ポーロのごとく詠歎してしまつた、詩人でない僕にはあの時の美しい西湖の黄昏を表現する言葉を知らない、古くは蘇東坡以下無數の詩人、新しくはいま西湖畔にある「黄龍洞」の[illegible]部隊長の言葉によつて[illegible]

は讀者よ、西湖の美しさを想像せよ

「おーい、記者さん、宿舍あつたかな、早くよかとこトリなさい」

ハッと我にかへつた、さうだ、支局をつくらねば…西湖の岸にはズラリ大厦高樓が夕闇のなかにホノ白く浮かんでる

西湖飯店、新々ホテル、西湖飯店、大上海、湖濱旅館、滄州旅館、大華飯店、新新旅館、大同旅館等々、あゝ數へるのがしんどいくらゐだ

これらの豪華なホテル旅館が西湖の水を[illegible]して居ならんでゐる、いはば「妾こそ」「アタシこそ」と美人競爭の舞臺に立つた彼女達が競艶孔雀のやうに羽を張るすがたにも似てゐた、しかも人つ子一人見えない寂とした夕闇のなかに死のやうに横はるこの湖畔の風景はまつたく異樣なものだつた、さうだ、灯影ひとつない湖畔の海岸通の旅館群を想像すればよい、兵隊さんが

勢よくアスファルトに兵隊靴の鋲をたゝきつけて通つた

「おい、あれはどうぢや」

「うん、すこしセマすぎるたい、あつちに行けばなんぼでもあるたい」

「こりやいゝぞ」

「うん、[illegible]たい〳〵ぜイタクいふな、ウワハッハ〳〵」

「アッハッハ〳〵」

白墨を右手に持つた兵隊さんたちが、もう薄暗くなつた舗道を右に左に走るのである

「朝日新聞、こゝはどうですな」

[illegible]の兵隊さんの笑顔に見あげると山腹ホテルの五、六層、窓數は二、三百もあらうと思はれるものすごい大ホテル、門の標には白墨の跡もリンリと「〇〇」と大文字が闇のなかに浮かんでゐた

「ウワハッハッハ〳〵」

何となく僕は胸のそこからをかしさがこみあげてきた、師團の傲慢な

姿を白墨片手に彷徨する自分の姿を心の中にふとふり返つて見た、子供の時お伽話できいた魔法の杖は觸るものすべてを黄金と化した、いまは指先に握る一塊のチョークはまた魔法の杖ではないか

「記者さん、こゝにしませう、こゝは堪えますぞ」

高君が嬉しさうに僕を呼んだ、懷中電燈を照らすと門の上に「杭州西湖、滄州大飯店」の大看板、支那の建築の豪華な[illegible]鐵門がピッチリ閉められた鐵門ごしに

「ウエーイ、ウエーイ」

と怒鳴つた、中國も留守もシーンとして物音ひとつしない

「よし、登らう」

いきなり高君は拳銃を右手に持つて鐵門の扉に足をかけ登りはじめた、ガチヤ〳〵と鐵の鋲がぶつかつて鳴つた、と、突然暗闇のなかからパタ〳〵と人の

走る氣配がして

「メメチヨー〳〵」

（待つて下さい〳〵）

と呼びながら支那人が三人懷中電燈の光線のなかに青白い顔面に[illegible]顔を浮かび上らせた、顔の八つの眼が怖れたやうに僕にふるへてゐた

葛嶺の山つゞきにある道教の古刹、庭の白梅はいま眞盛りである、日射しは眞夏のやうな強烈さ、記者（兒玉）は日傘をさして探勝、支那人の少年達とすぐ仲好しになつた

り寺内司令官より

ワーエル・ベンリングトン女史の一

かつた、それだからといふちや

日本の支那に派遣した探險家が一

た上

お伽噺の富豪兒先生（アルシーサン）

戰爭の横顔②　兒玉特派員手記

窓の外は滿目日の丸

飛び出してきた支那人三人は五、六間先に止つてヂッとこちらをうかゞつてゐる、高君が威嚴をもつた聲で

「朝日新聞だ、門を開けなさい」

といつた、すると三人のうちの四十五、六歳長身の男が

「おゝ、大阪朝日新聞！、おう、おういますぐ開けます」

みる／＼顏色を和げ、アトの二人に早口で何かいつた、そして

鍵束　をガチヤ／＼いはせながら鐵門に走りよつてきた

「われ／＼はこのホテルに入りたいのだが、諸君に異議はないか」

高君の言葉に三人は恭しく支那風に頭をさげて

「新聞先生、よくいらつしやいました、どうぞ／＼、このホテル全部を御使用下さい、われ／＼も一緒にぜひどうぞ使つて下さい」

といふのだ

「室數は」

「おう、九十七室、スペシアル・ルームも加へまして」

高君は

「え、九十七、ウワーこれやどうも」

日本語でいつて僕と顏見合せて笑つてしまつた。

「雇人はいま何人ゐるの？」

「全部で十三人をります、僕はわれ／＼十三人とも使つていただきたい」

「よろしい、食糧は保障する、給料も與へる、みなこゝへ呼び給へ」

さつきの長身の男が

「ウエーイ、みんな出てきなさい」

しーんとした建物の方に大聲で呼んだ、ズーッと並ぶ

二階　の窓の窓ガラスが鮮明りににぶく銀色に光つてゐた

◇

二階の最上等のスペシアル・ルーム、窓に顏をくつつけてのぞくとガラスごしに西湖は湧きあがる夜霧のなかに蒼茫と水面を光らせてゐた、部屋中電燈の光に映しだされた紫檀の机、ソファ、天井のシャンデリヤがびつくりしたやうにチカチカ光つた、階段を「ホウ／＼ホウ」と掛聲かけて布團を運ぶ、湯をはこぶ、「滄州大旅館」はいま甦つたやうに賑やかになつた、二、三人を指揮して最初から僕たちと口をきいてゐた丈の高い支那人が布團を僕の室に運びこんできた

「你の名前は？」

「王仁永」

安心と不安のなかに沈んだやうな階段でまだオド／＼しながら答へた、無理もない

「おゝ王、心配することはない、われ／＼は新聞記者だ、このホテルに支局を借りるだけだ、みな十三人とも安心してゐたまへ」

この王がボーイ長だつた、旅館の主人は一ケ月前に

上海　に避難してボーイ長王以下十三人がこのホテルにとぢ籠つてゐたといふのだ、五枚重ねの絹布團を頭からすつぽり被つたらほのかに香料のにほひが支那料理の油の香にまざつてした、まつ暗闇の中で自分「兒先生」の奇妙なシチュエイションを心の中にふり返つてみたらも一度をかしくなつて笑つてしまつた、高君にいはれて萬一の場合といふので、ピストルを一發安全裝置を外して枕もとにおいた、深々とした緞帳のなかで幅六尺はあらう特大ダブルの支那ベッドの上でひやつこい支那絹の敷物と掛布團の袖のあたりにしみこんでゐる支那料理？のにほひを嗅いでゐるうち五分間とは經たぬ間に睡りの波に没してしまつた、一町ほど向ふで銃聲が五六發鳴つたのを聞いたやうに思つたが…

初陽台から見た西湖、前景の少年は支局のボーイ長王の長男阿寶（兒玉特派員撮影）

く朝王がお茶と洗面器にみたした

お湯　を捧げて入つてきた、ニコ／＼笑ひながら

「兒先生お早うございます」

僕はあわてゝピストルを布團の下におし込んだ何となく恥かしかつたからだ、すばらしい天氣だ、西湖がカッと照る陽光に金色に輝いてゐた

「王、ゆふべは大變なクリスマス・イーヴだつたね、アッハッハ」

と笑つたら王も

「アッハッハ」

と人なつこい笑顔で一緒に笑つた

「御飯の用意は出來てゐるか」

王は「おう」と頭をさげて厨房のところに行き

「ウエーイ、食事用意」

といふ下から五、六人の聲で

「おーう、おーう」

といつた、窓から見わたすと、どのホテルにも日の丸の旗がパタパタと鳴つてゐた、そしてホテルの窓といふ窓はからり明け放されて兵隊さんのシャツ

毛布　サルマタがずらり日光浴の滿艦飾だ、そして窓には十年も前からそこに住んでゐたやうにすました兵隊さんの顏が煙草を吹かしてゐた、戰爭とは別の言葉でいふと、もの凄く壯大な一つのお伽噺ではなからうか

◇

それからマル二ケ月、忠實なボーイ長王、コツク長馬君僕ら「十三人の支那人」との西湖畔の生活ほど樂しい思ひ出に彩れた日はなかつたやうに思ふ

北支運動界起つ

東京大會へ參加を熱望

【同盟北京二十三日發】一九四〇年のオリンピック東京大會に對し新興の意氣に燃ゆる中華民國青年の間に參加要望の聲が擡頭し新民會を中心として漸く具體化の機運に向ひつゝあるが最近の北支各大學、專門學校は何れも新政權の統治下にスポーツの春を謳歌しつゝあり明後年盟邦日本に開かれるオリンピック大會には是非とも參加しその技倆を世界に發揮しようといふので新民會にこれが具體的運動を懇請する向きもあり、同會としても國民の體育向上の見地から新民體操を近く設定する一方體育聯盟結成の方針にあるので來るべき東京大會には全種目出場は困難としても一部競技に出場すべく非常な意氣込みで關係方面に折衝を續けてゐる、右に關し當局下村會長は左のごとく語つた

オリンピック參加に關してはIOCで決めるのだから我國の一存ではなし得ないがさういふ運動の起つたことは誠に喜ばしいことである、われ／＼としては日支青年層が握手せねばならぬと信じてをり、過般新政府の內政顧問として渡支した體協副會長湯澤三千男氏もかういふ考へを持つてをられたから案外早くこの明朗な運動が起つたのだらうと思ふ、この際オリンピック參加問題は別としても近く開催される第一回東洋選手權大會參加がもつと手近な問題でありこれこそ我々の望んでゐる日本滿洲、フイリッピン、中華を一環とした眞に意義ある東洋大會が實現されることにならうと思ふ

天津特四區に天然痘

【天津特信】天然痘が今度は特別四區に發生しました—特別四區大經路診療所內岡田常明さん（[illegible]）は去る十七日發熱以來微熱がをかしいので醫師の診察を受けたところ天然痘と判明、隔離病院に收容、同家を消毒するとともに附近住民に對し種痘を行つたが、今後も蔓延の惧あり、一般居留民もこの際特に注意ありたし

十名をもつて警備隊を組織して日本人街の警戒に當つてゐる、平和な南京だが治にゐて亂を忘れぬといふところ

◇

【北京特電二十五日發】世の中に北京市の[illegible]ぐらゐ神經を尖らせいらいらさせ、腹に障り、能率を低下させるものなし、何とかして下さいよ

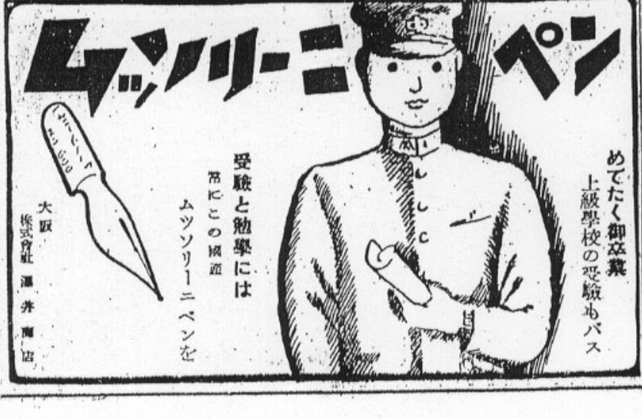
◇

【天津特電二十五日發】日本租界の植込の樹木を某方面より寄附の申出があつたが鹽分の多い天津の土にどう根をつかせるか難しい問題だ

◇

【青島特電二十五日發】青島在留邦人の被つた被害調査[illegible]に二十四萬枚、暮にお節ひかけての[illegible]市街[illegible]

京染
特約店募集
最新見本豐富
小資・無經驗の方にも副業にも好適
京染手引・營業案內・ニュース附呈
全勝黑染元
京都市醍ケ井通六角下ル
京染問屋
自生地
（大）合名會社 寺尾眞一商店
電本六二一一番



ムッソリーニペン
めでたく御卒業
上級學校の受驗もパス
受驗と勉學には
常にこの國產
ムツソリーニペンを
大阪
株式會社 澤井商店